

5 五～六世紀の新羅と周辺諸国の瓦

(原題：5～6世紀 新羅와 周辺諸國의 기와)

金有植

(国立扶餘博物館)

A はじめに

古代国家の文化交流は、自律的な関係と他律的な関係において存続した。瓦は工人や当時の知識層によって他地域に伝播し、また受容された。筆者は、瓦の受容には、受容国の文化的な意志と嗜好が大きく作用したと考えている。とくに軒瓦は、国家や時代によって多様に変化・発展し、そして衰退していくという文様の流れを知ることができる。その様式的な特徴は、国家間交流の研究において重要な資料になるであろう。軒瓦という糸口を通して、建築と工芸など当時の社会相を研究し、文化史を復元する必要があると考える。

6世紀の新羅は、智證王と法興王の代に体制を整備することで、内在的な発展を遂げた。この時期は、新羅のみならず、韓半島の三国が政治・社会的に飛躍的な発展を遂げた時期であり、互いに適度に牽制しつつも、均衡を図った時期でもある⁽¹⁾。新羅は、百済や高句麗、そして中国を通じて先進文物を受容すると同時に、一つの政治システムとして、仏教による国論統一と理想的な社会の実現を目指す志向性がうかがえる。

当時の仏教は、宗教的な役割以外に、先進文物を輸入する窓口としての役割もあった。仏教の公認によって寺院の造営があいつぎ、仏像、塔、建築、工芸などに飛躍的な発展がみられたのである⁽²⁾。新羅が土着社会の壁を乗り越え、巨大な寺院を造営した6世紀は、新たな文物の導入期にあたる。とくに瓦は、建物の建立にさいして非常に重要な器物である。したがって、仏教の公認は、瓦の刮目すべき発展を招来する契機になり、かつ工人たちの職制を含む生活条件を向上させたであろう。

東アジアの対外交渉を理解する作業は、非常に難しく、慎重を期さねばならない。とくに交渉は、国家、民族、地域間の対等な交流を意味し、肯定的な側面のみならず、否定的な側面も明らかにする必要があろう⁽³⁾。こうした立場に立ち、5～6世紀における東アジア諸国の瓦の中心的な文様であった蓮華文様の微細な変化を通じて、国家間の流れを検討し、共通点と差異点を導き出したい。

本稿では、以上のことがらを念頭に置き、三国の軒瓦の研究成果⁽⁴⁾を整理しつつ、6世紀の新羅の軒丸瓦の製作年代を検討し、蓮弁の淵源を考えていきたい。また、6世紀の新羅の蓮華

文軒丸瓦の重要性に着目して論を進める。しかし、資料的限界と筆者の瓦に対する理解不足のために、多くの誤謬がふくまれている可能性はある。それでも、新羅における軒丸瓦の受容過程を明らかにする一助になれば、という思いで作成したものであり、ご海容願いたい。

B 5～6世紀の新羅周辺諸国の軒瓦

5～6世紀は、高句麗、百済、新羅が互いに攻防する緊迫した情勢にあった。高句麗の故国原王は百済の近肖古王に殺害され、後に百済の蓋鹵王は長壽王に殺害された。さらには、新羅が管山城で百済の聖王を殺害している。このように、非常に緊迫した情勢のなか、三国間では外交的な関係を含めた文物交流が適宜営まれていたのである⁽⁵⁾。

皮肉にも、この時期の新羅の軒丸瓦には、高句麗と百済の瓦に見られる要素が多く認められ、三国の交流を明らかにする一つの手がかりとなる⁽⁶⁾。とくに6世紀の新羅の軒丸瓦は、製作技法のみならず、文様にも高句麗や百済との親縁性が強く見られる。このことは、三国が緊張関係にある中でも、ある時期や期間は密接に交流していたことをうかがわせる。すなわち、三国の冷厳な国家関係は相互の文化的な断絶をもたらしたはしたが、時には緊張が緩和し、文化交流が行われたと仮定してみることもできよう。

6世紀の新羅の蓮華文軒丸瓦には、高句麗と百済の要素が見られることから、新羅は両国の先進文物を受容して建築物を造営したと考える。6世紀の新羅の瓦が重要な点は、高句麗と百済の文化を受容が読み取れ、後に統一新羅の瓦へと継承されていくことであろう。

(i) 高句麗、百済系蓮華文軒丸瓦の受容

6世紀は、新羅で軒瓦が初めて製作された時期である。蓮華文軒丸瓦の蓮弁の形式(型式)によって百済系、高句麗系、新羅系に区分される⁽⁷⁾。このように、新羅軒丸瓦が三つの形式に分かれることは多くの研究者が認めているが、軒丸瓦の発生時期や、蓮華文の起源を含めた高句麗系や百済系の属性についての分類は明確にされていない。また、高句麗系と百済系の軒瓦が新羅瓦の発展にどういった影響を及ぼしたのかについても、具体的な研究は進んでいない。こうした研究は、新羅瓦の機能的な側面のみならず、当時の計画された荘厳性を理解する手がかりになる。

また、高句麗系の瓦が新羅地域に波及して新羅瓦のモチーフとなり、その発展を促したという点については、以前から多くの指摘がなされた⁽⁸⁾。しかし、新羅地域に伝播した高句麗系瓦については、吉林や平壤地域の出土資料を具体的に提示せずに、文様のモチーフのみで区分する傾向がある。たとえば、新羅の蓮華文軒丸瓦の中で、蓮弁中央に凸線を有するものは少なくないが、それを高句麗の影響を受けたものと判断しきってしまう場合がある。これは日本の学界でも認められている考え方で、高句麗瓦を区分する基準にもなっている。このような状況は、新羅瓦に対する明確な概念が研究者間に共有されておらず、早急に修正すべき点があることを暗示していると考えられる。

新羅瓦に見られる高句麗系の要素は、形式と特徴を定義しにくい。そして、百済系の新羅瓦は、熊津期の瓦との類例性を根拠として、漠然と6世紀前半頃に受容したとみる説が支配的である。こうした状況は、新羅軒瓦の製作時期と対外交渉に関する研究の障害となるばかりではなく、新羅瓦の正確な編年設定の悪影響にすらなる。

(ii) 高句麗系蓮華文軒丸瓦

高句麗瓦は、吉林地域と平壤地域の瓦に大きく区分される⁽⁹⁾。ここで詳しくは説明できないが、吉林地域の軒瓦は、色調は灰褐色で、文様が蓮華文、平壤地域の軒瓦は、色調が赤色で、文様は蓮華文以外にも多様に発展した、と要約できる。また、両地域の瓦は、胎土と文様、色調、製作技法などにおいて細分が可能である。それにもかかわらず、新羅の高句麗系軒丸瓦と関係があるのはどの地域で、どのような形式であるのかという点については、いまだに明確な回答が提示されていない。

これまでに慶州付近から出土した高句麗系蓮華文軒丸瓦は、月城(図1-①・②)と皇龍寺跡(図2・3)などである。前者は、月城塚字の5～6世紀の遺物と伴って出土している。後者は、皇龍寺跡から出土したスペード形の蓮華文軒丸瓦である。そのほかに、財買井跡(図4)などから出土した軒丸瓦が高句麗系に見えるが、確証がないので、ここでは除外する。

まず、月城から出土した軒丸瓦の特徴は、次のようである。蓮弁は八弁で、量感あふれる表現である。蓮弁の先端部と稜線を三角形に鋭く仕上げている。この軒丸瓦は、表面の硬さから見ると、かなり高い温度で焼成されており、厚さも薄い。瓦の厚さは建築構造物の重さと密接な関係があると指摘されており、その製作には、高い技術を有する工人の熟練した技が必要であったろう。

ところが、図1-②の軒丸瓦は、瓦当面が狭いという理由で、1弁の蓮弁を逆に配置しており、間弁もほかに比べて小さい。蓮弁外側の溝も粗雑で、外縁の半分ほどは范から粘土がはみ出し、段になってしまっている。これは、高い技術をもたない工人が製作したか、あるいは不良品と見るよりほかない。当時の月城は最高権力の中心部であり、最高級の器物が用いられたと見るほうが合理的だが、不良品、またはきちんと仕上げられていない軒丸瓦が月城に使用された状況をどのように理解したらよいのか。

また、別の形式として、皇龍寺跡出土の高句麗系蓮華文軒丸瓦がある⁽¹⁰⁾。この軒丸瓦は、蓮弁先端の幅が急に狭くなる、いわゆるスペード形式(図2・3・20)であり、百済系の範囲におさめることはできない。この瓦は、重量感のある中房とそれ以外とを分けて瓦范に粘土を押し詰み、製作している。そのため、工程が複雑となり、大量生産には無理があると判断できる。また、軒瓦製作における複雑な工程⁽¹¹⁾は、不要な手間がかかり、製作時間が長くなる。経済的にも非効率的で、諸々の面において悪影響を及ぼすであろう。すなわち、このような形式の瓦は少量生産に適したもので、皇龍寺のような大規模寺院への供給用としては、多少不合理な製品のように見受けられる。それにもかかわらず、このような瓦が皇龍寺造営に関連しているこ



図1-① 月城出土蓮華文軒丸瓦

図1-② 月城出土蓮華文軒丸瓦



図2 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦

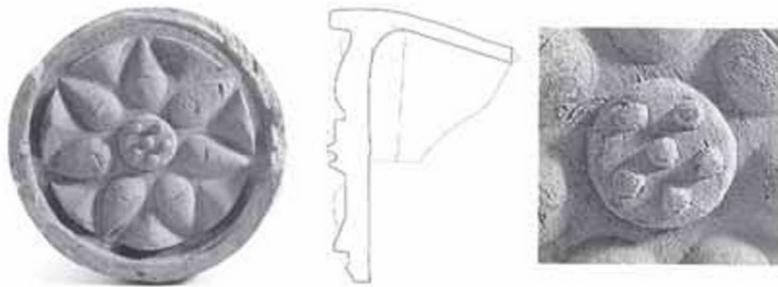


図3 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦



図4 財買井跡出土蓮華文軒丸瓦



図5 大通寺跡出土蓮華文軒丸瓦

とに、当時における皇龍寺の社会的な位置が読み取れる。

結局、このような新たな形式の蓮華文軒丸瓦の出現は、消費先の重要性と関連するものと考えられる。この蓮華文軒丸瓦は、胎土が安定しており、高い温度で製作された典型的な三国時代新羅の瓦の特徴を有する。精巧かつ安定感のある蓮弁の形状から、代表的な新羅の蓮華文軒丸瓦と評価することもできよう。そして、蓮弁と間弁が三角形状を呈すること⁽¹²⁾から、前述の月城塚字出土の蓮華文軒丸瓦との類似性を考えることができる。

(iii) 百済系蓮華文軒丸瓦

百済系蓮華文軒丸瓦は、月城塚字を含めて勿川里⁽¹³⁾、安康六通里窯跡⁽¹⁴⁾、そして慶州付近の乾川や内南面望星里（花谷里）窯跡から出土した。百済系軒丸瓦は、灰白色と灰褐色の系統であり、文様形式は百済の熊津系軒瓦と酷似する。類似する熊津期百済の瓦は、公山城をはじめ、大通寺跡、艇止山遺跡、西穴寺跡（図5～7）などから出土している⁽¹⁵⁾。

しかし、綿密に分析すると、細部形式には若干差異がある。すなわち、新羅地域出土の蓮華文軒丸瓦よりも、百済地域の蓮華文軒丸瓦は、蓮弁の先端に配置される珠文が小さく弱いことが観察できる。筆者は、新羅地域に見られる百済系蓮華文軒丸瓦は、熊津期の瓦と対応するのではなく、熊津期より先行する様式と判断する。したがって、このような形式は、熊津期前期の建物や漢城期末期の建物の瓦と関連がある可能性を提示したい。なぜなら、熊津期の軒丸瓦は、蓮弁が退化・簡略化する段階と理解でき、新羅の百済系軒丸瓦よりもむしろ後出する可能性がうかがえるのである。今後、漢城、熊津期の瓦において、より先行する形式が出土する可能性を考慮しておく必要がある。

次に、熊津期に流行した百済の蓮華文軒丸瓦が、新羅瓦の発展にどのような影響を及ぼしたのかについて注目する必要がある。実際に、慶州地域から熊津期百済の影響が見られる蓮華文軒丸瓦は各遺跡から出土しており、百済瓦が新羅瓦の発展に決定的な影響を及ぼした点については同感である。この点に関しては、最近、慶州内南面望星里窯跡から同じ形式の蓮華文軒丸瓦（図8）が出土したことで、月城への供給が明らかになり、同伴遺物から5世紀後半まで遡る可能性が指摘されている。

したがって、百済系瓦は、新羅地域に普及したのち、6世紀代には新羅の蓮華文軒丸瓦の成立に決定的な役割を担ったのみならず、徐々に発展する基盤をつくったと考えている。

三国時代新羅瓦の展開は、百済から蓮華文を受容し、これを徐々に新羅化させていく動きと推定できる。このような推定は、新羅瓦の採用された百済系瓦の弁端を丸く処理した蓮弁や、Y字形の間弁の流行からも裏づけられよう。今後の検討が求められる。

C 5～6世紀の新羅周辺諸国の軒瓦製作技法

6世紀の新羅の蓮華文軒丸瓦は、製作技法から大きく二つの形式に分類できる。それは、円筒形の丸瓦を瓦当裏側に接合し、丸瓦の半分を切る技法と、あらかじめ半截した丸瓦を接合す



図6 艇止山出土蓮華文軒丸瓦



図7 西穴寺跡出土蓮華文軒丸瓦



図8 内南面望星里窯跡出土蓮華文軒丸瓦

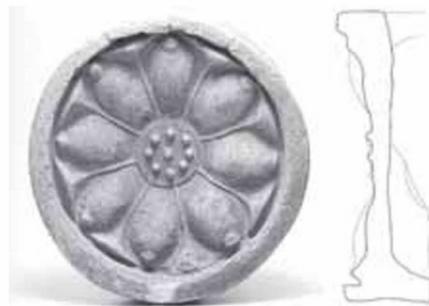


図9-① 月城出土蓮華文軒丸瓦

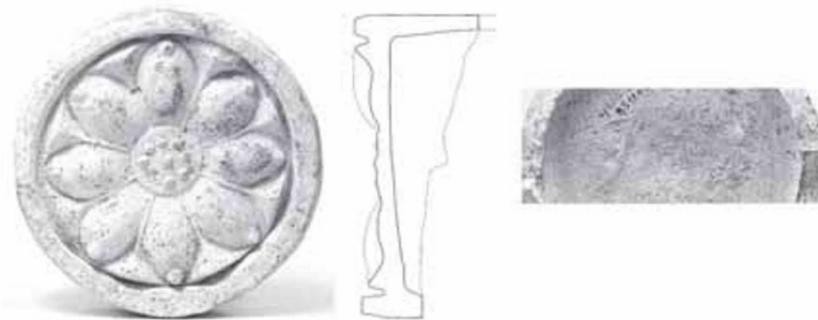


図9-② 月城出土蓮華文軒丸瓦

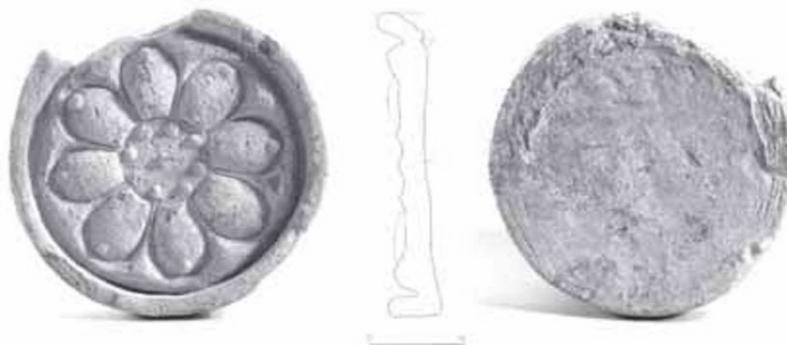


図10-① 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦

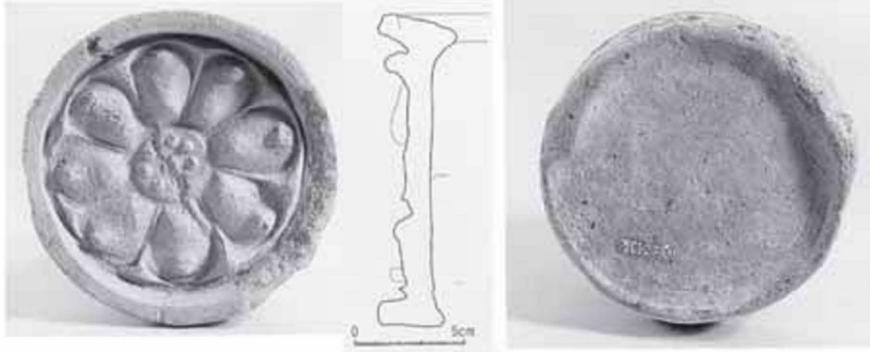


图 10—② 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦



图 10—③ 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦

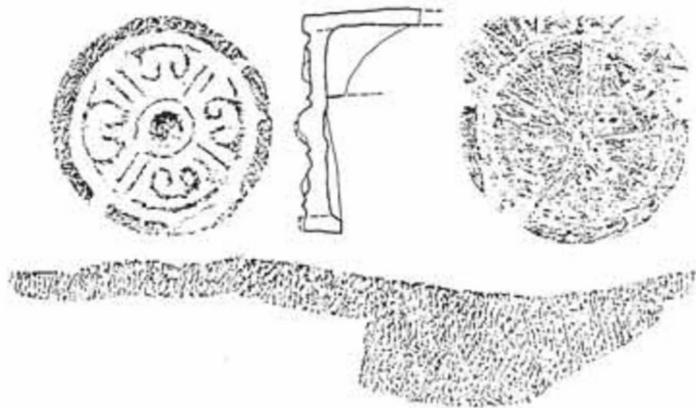


图 11 平壤土城里出土軒丸瓦

る技法である。このうち、前者は「一本作り」⁽¹⁶⁾と呼ばれ、月城塚字の軒丸瓦（図9-①・②）をはじめ、勿川里競馬場敷地出土の軒丸瓦（図10-①～③）、内南面望星里窯跡の軒丸瓦（図8）などが代表的である。一方、乾川、安康六通里窯跡から出土した蓮華文軒丸瓦は、蓮弁は百済系であるが、製作技法は後者に入る。月城から出土した蓮華文軒丸瓦には熊津期の形式が認められ、新羅軒丸瓦の製作開始年代を6世紀前半に遡らせることができる。また、勿川里をはじめとして、内南面望星里窯跡からも同じ形式の軒丸瓦が出土し、宮に供給した瓦窯の位置が明らかになった。

6世紀前半の百済系蓮華文軒丸瓦の一本作りという特殊な製作技法は、中国西晋以前に見られる技法と類似する⁽¹⁷⁾。この技法は、瓦当裏面の円筒下半部を約0.5cm残るように切り取るもので、韓半島の楽浪と漢城期の軒丸瓦においても観察できる⁽¹⁸⁾。年代的には、楽浪地域から出土する雲気文軒丸瓦（図11）が先行し、その次が漢城期である。ただ、楽浪の雲気文軒丸瓦が韓半島の瓦の発展に影響を及ぼしたのかについては、いまだ疑問である。楽浪出土瓦の文様と胎土、そして製作技法には、平壤の高句麗瓦と直接な関係を示す要素を見出すことができない、という難題が残っている。

最近、百済前期の瓦について、活発な研究が進められており⁽¹⁹⁾、粘土紐による製作、厚さの不均衡、微細な布目痕、泥条盤築技法などの特徴が見られることが指摘されている。こうした特徴は楽浪瓦との関連性がうかがえ、漢城期の瓦は楽浪の瓦とつながる可能性を示している点で注目される⁽²⁰⁾。今後の楽浪と高句麗、そして百済瓦の関連性を明らかにする資料の発見に期待したい。

漢城期百済の軒丸瓦としては、風納土城、夢村土城、石村洞、三成洞から出土した資料がある。この時期の軒丸瓦文様には、点文、幾何学文、草花文、蓮華文、銭文があり、新羅の軒丸瓦と製作技法が類似するものとしては、風納土城、夢村土城、石村洞出土の軒丸瓦を挙げることができる。

この中で風納土城から出土した軒丸瓦（図12）は、製作技法については百済系の新羅軒丸瓦と同じであるが、文様は全く異なる特徴を有する。また、夢村土城出土の蓮華文軒丸瓦（図13-①・②）には、蓮弁が菱形のもの（①）と単弁のもの（②）の二つがあり、菱形のものは瓦当裏面が湾曲している。単弁のものが製作技法において新羅の百済系軒丸瓦と類似する。さらに、石村洞から出土した銭文軒丸瓦（図14）も新羅の軒丸瓦と製作技法が同様である。

6世紀前半の百済系新羅瓦は、粘土紐を用いた成形と厚さの不均衡など、初期の瓦陶兼業段階の特徴が認められ、漢城期百済の瓦の特徴と判断できる。一方で、文様の面では熊津期の瓦と近い。結局、軒丸瓦の接合技法から見ると、新羅瓦は楽浪、漢城期と同じ範疇に含めることができると考える。この時期は、粘土紐による成形技法が特徴的であり、初期の軒瓦製作に土器工人が参与していたのかについて注目する必要がある。

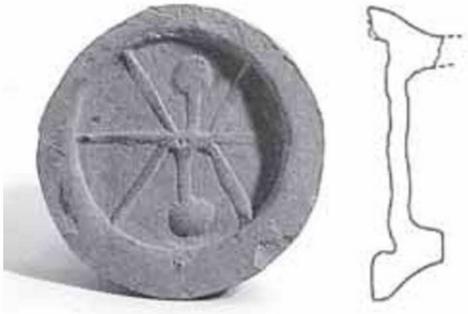


图 12 風納土城出土軒丸瓦

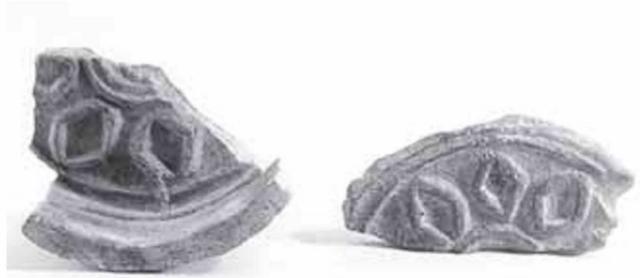


图 13-① 夢村土城出土軒丸瓦

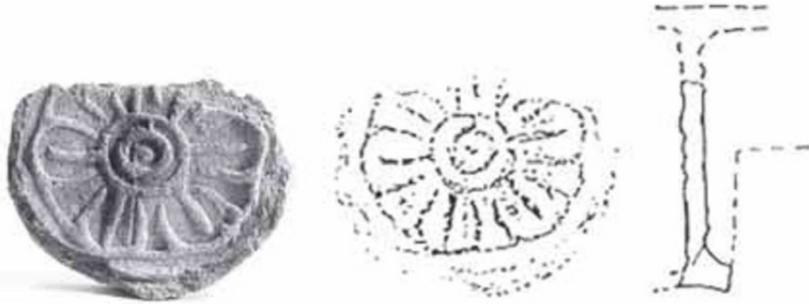


图 13-② 夢村土城出土蓮華文軒丸瓦

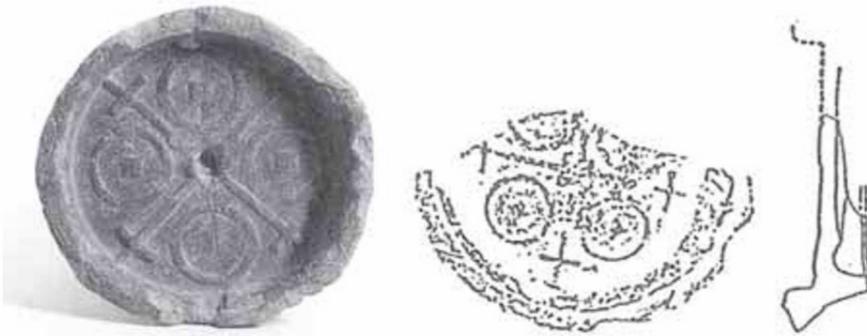


图 14 石村洞4号墳出土蓮華文軒丸瓦

D 6世紀の新羅の軒丸瓦の起源と編年

(i) 軒瓦の起源

瓦研究者は、6世紀の新羅の軒丸瓦を百済系と高句麗系に分類しており、前者は南朝から影響を受けたという点を重要視している。筆者は、百済の蓮華文と南朝の関連性について異論はないが、それ以前の漢城期百済でも蓮華文が流行していたことに注目したい。

新羅の高句麗系軒丸瓦は、その起源については明らかになっていない。ただ、吉林あるいは平壤地域の蓮華文軒丸瓦と形式が似ていることで、高句麗と関連づけている。しかし、上原和氏は、高句麗壁画に見られる蓮華文を構造的に分析して、それら壁画の蓮華文と吉林地域から出土する高句麗の初期の蓮華文軒丸瓦を関連づけた⁽²¹⁾。すなわち、高句麗安岳1号墳の西側室被葬者主人図(図15)、舞踊塚壁画(図16)、長川1号墳(図17)、双楹塚(図18)などで見られる蓮華文は、吉林地域出土の蓮華文軒丸瓦の文様と同一であることを明らかにした。また、こうした形式は、中国山東省沂南画像石と甘肅省酒泉県丁家2号墳などの蓮華文と関係があると指摘した。さらに、天王地神塚壁画に見られる人字形の大斗は、北齊に見られ、北魏で流行した華北地方の建築様式であるとする見解⁽²²⁾が提起されており、高句麗建築と北齊、北魏との密接な関連性についても念頭に置いておく必要がある。

一方、高句麗古墳壁画と新羅瓦にみられる蓮峰形の蓮華文は、中国固原北魏墓でも確認されている⁽²³⁾。この墓からは、鏃斗、陶器、銅帽など、多量の北魏系遺物が出土した。とくに、漆棺の蓋に描かれた図像(図19)は、高句麗壁画や新羅瓦に見られるY字形蓮峰文と類似し、その関連性を類推できる資料になる。また、この墓の副葬品の中には、ササン朝ペルシアの貨幣(457～483年)が含まれている。このことから、蓮峰形蓮華文は、北魏時代から高句麗、新羅地域で流行した文様と仮定することができる。こうした推論が認められるのであれば、新羅の蓮峰形蓮華文(図4・20)は北魏の文様との関連も考えられる。このように、蓮峰形蓮華文については、高句麗吉林地域の太王陵出土の蓮華文軒丸瓦(図21)や、前述した高句麗古墳壁画および固原の北魏墓との親縁性について注目したい。

絵画とは違って、瓦については、工人集団が直接に往来して技術を伝えるという側面も考慮すべきである。ただ、新来文化の伝播経路を検討する際には、たとえ材質が異なる要素であっても、形式的な特徴を通して、その相関性を理解する手がかりとなろう。とくに蓮華文は、国家や時代によって、多様な特色を持ちつつ変化していくので、対外交渉の実相を調べる際の重要な資料になると考える。国家の文化発展は、周辺文化圏の交流による文化受容のみならず、それを独自に発展させ、継承していく文化変容の過程こそが重要であろう。

(ii) 蓮華文軒丸瓦の編年

研究者は、新羅における軒瓦の発生を、おおむね6世紀前半と考えている。『三国史記』新羅本紀祗摩王11年(122)の「風によって瓦が飛ぶ」という記事をそのまま信じる研究者は少な



図 15 安岳3号墳の蓮華文

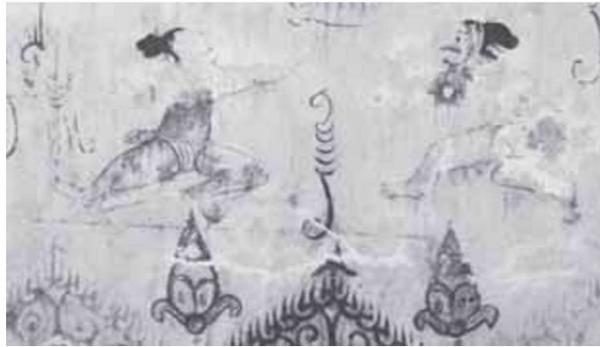


図 16 舞踊塚の蓮華文



図 17 長川1号墳の蓮華文



図 18 双楹塚の蓮華文

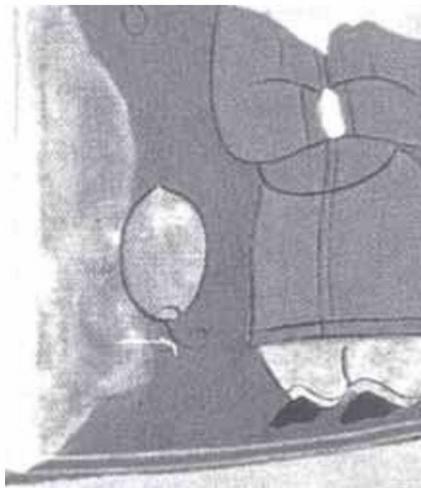


図 19 固原北魏墓漆棺画の蓮華文



図 20 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦

い。しかし、古代の韓半島では、高句麗で4世紀以前に軒瓦を製作しており⁽²⁴⁾、百済でも漢城期から本格的に瓦を使用している。また、5世紀に入って土器製作技術が飛躍的に発展することを強調しておきたい。これらの点から、新羅瓦の発生時期をより遡らせて考える方が合理的ではないかと考えている。

従来、新羅瓦の発生時期を遅く考えた理由は、『日本書紀』の仏教伝来と瓦の技術がともにもたされたという記事であると考えている。ただ、高句麗と百済で4～5世紀頃の建物に軒瓦が使用されたことは、現在までの研究成果によって認められている。それに対して、新羅のみが6世紀になってようやく瓦を用いるようになったと見るのは不合理である。新羅瓦の研究者が軒瓦の発生を6世紀と考えるのは、軒瓦の出現が仏教寺院の創建と軌を一にする、という固定観念によるものである。仏教公認の際に社会的に強い摩擦が生じた新羅が、仏教寺院よりも先行して宮や官衙に瓦や軒瓦を葺いたという筆者の仮説は、いまだゆるがない。実際、瓦の使用が寺院よりも宮の建物で先行したとみることは、それほど無理はない。瓦の研究方法に客観的で合理的な方向性があるにもかかわらず、その解釈が先入観によって縛られてしまうことは止揚すべきである。

新羅の高句麗系瓦は、月城垓字や皇龍寺跡出土例が代表的である。その中で、月城垓字出土の蓮華文軒丸瓦は、その起源がどこにあるのかについてはいまだ不明瞭であるにもかかわらず、蓮弁の形式と製作技法、そして表面の硬さから、高句麗系であると判断されている。こうした軒丸瓦は、これまで月城のみで確認されている。よって、この軒丸瓦の製作年代について、皇龍寺の創建年代である6世紀半ばを下限、上限を6世紀前半としても無理はないであろう。筆者は、月城垓字出土の高句麗系軒丸瓦を、月城から出土する蓮華文軒丸瓦の初期段階におきたい。外縁の処理が未熟であること、ほかの遺跡から出土していないこと、そして量感あふれる古式の蓮弁と三角状の間弁などが他の軒丸瓦とは異なるからである。また、その軒丸瓦が5世紀の土器と共伴して出土することも理由の一つとなる。

一方、高句麗系軒丸瓦は、皇龍寺創建を契機として大きく変化する。蓮弁が、従来の三角形のものから、先端が急に縮小する、いわゆるスぺード形に変化した。こういう形式は廃瓦堆積から出土するので、皇龍寺創建期あるいはそれ以前に製作された可能性もあろう⁽²⁵⁾。一方で、Y字形の凸線をもつ軒丸瓦の破片(図20)は1点のみであるので⁽²⁶⁾、その製作年代の決定には慎重を期さねばならない。この瓦については、吉林地域で流行したY字形の蓮弁と高句麗古墳の壁画の蓮弁、そして固原の北魏墓に見える蓮弁との関係に注目したい。

高句麗系の新羅軒丸瓦は、瓠蘆古壘山城⁽²⁷⁾出土の軒丸瓦(図22)のように、蓮弁と間弁が三角形状で力強い印象がある。ただ、この形式の瓦を製作した窯がどこに存在するのかはいまだ不明で、研究に限界がある。瓦の工房で当時の工人が使用した土器を含めた生活容器や、窯での生産品などが、対外交流の確実な物的証拠となろう。

百済系軒丸瓦の製作技法には二つの形式が見られる。一つは一本作り、もう一つは接合式で



图 21 太王陵出土蓮華文軒丸瓦

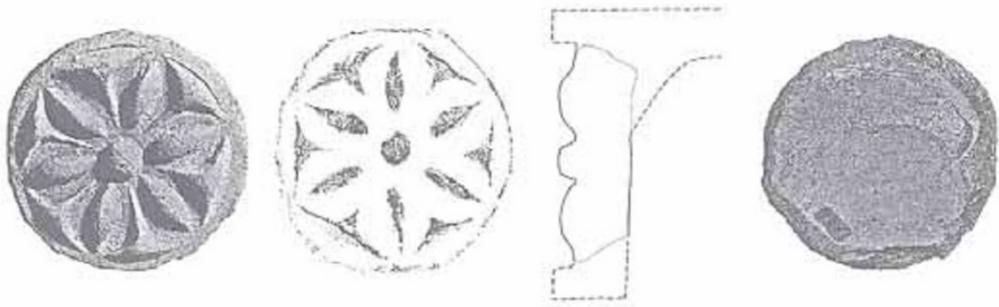


图 22 瓠蘆古罌出土蓮華文軒丸瓦



图 23 乾川西面出土蓮華文軒丸瓦

ある。二つの技法は同時期にみられる。前者は製作技法の面で漢城期と関連するが、文様は熊津期のもものと類似する。すでに指摘したように、熊津期の公山城、艇止山遺跡、西穴寺跡、大通寺跡などで出土した軒丸瓦は⁽²⁸⁾、蓮弁の先端の珠文が、新羅の百済系軒丸瓦よりも小さく弱い。その点で、新羅軒丸瓦が熊津期より先行段階である可能性が考えられる（図 23）。また、新羅瓦の製作技法は漢城期の軒丸瓦と関係があることから、製作時期が熊津期半ばに編年されている点については、修正を加える必要があると考える。今後、熊津期前期の遺跡あるいは漢城期末の遺跡から軒丸瓦が出土すれば、新羅地域軒丸瓦の発生年代についての問題はある程度解決されると期待する。

まだ推論の段階ではあるが、新羅軒丸瓦の出現時期は5世紀後半から6世紀初頭と想定しても無理はないと思う。こうした推論によるならば、新羅の軒丸瓦が、熊津期の軒丸よりも先行する百済の軒丸瓦形式の影響を受けて製作された可能性も考えられる。熊津期の瓦は文様が定型化し、製作技法のうえでも本格的な発展の段階に入っている点も強調しておきたい。

E まとめ

以上、新羅と周辺諸国の瓦について検討してきた。述べた内容に明確な裏づけがないことは自認している。ただ、新羅の宮跡から出土する軒丸瓦は、熊津期の軒丸瓦より先行する可能性が高い。従来の編年には修正を加える必要がある。また、最近の調査で、慶州の遺跡から百済のより先行した軒丸瓦が出土しており、新羅軒丸瓦の出現は従来いわれていた6世紀前半よりも遡る可能性が高いと考えている。筆者は、具体的な物証というよりは、形式的変遷を中心に、新羅の百済系軒丸瓦が熊津期よりも先行する可能性に考えた。この推論には、今後、批判が予想されるが、百済の都であったソウルと公州地域の発掘調査を通じて、確実な証拠が得られることを期待する。

本稿で新羅と周辺諸国の瓦について検討した内容は次のとおりである。

- ① 月城塚字から出土した高句麗系、百済系の軒丸瓦の出現は、6世紀第1四半期あるいは5世紀の後半まで遡る可能性がある。
- ② 史料を信用しないとしても、新羅における瓦の使用時期を6世紀前半とみる見解は修正を要する。また今後、平瓦の発生時期についても、特定時期にあらかじめ限定せずに、考古学的な発掘調査成果に基づいて検討する必要がある。
- ③ 一本作りの技法については、中国、韓国、日本の研究者による相互の比較検討が早急に求められる。この技法が、古代韓半島において楽浪、漢城期百済、新羅初期の瓦に共通して見られることに注目すべきである。
- ④ 新羅は、6世紀初め以前に高句麗系と百済系瓦の製作技術を受容し、その変容と発展を図り、6世紀半ばには高句麗系の新形式が出現したことを明らかにした。また、新羅で流行した高句麗系の蓮華文は、北魏でも流行したモチーフである可能性を提起した。

註

- (1) 朱甫暉『金石文と新羅史』知識産業社、2002年。
- (2) 大橋一章「日本古代文化相の観点から見た百済の金属工芸」『古代東アジアの金属工芸』国立扶餘博物館国際学術大会、2008年。
- (3) 安輝濬「美術交渉史研究の諸問題」『高句麗美術対外交渉』1996年、p.11。
- (4) 崔孟植「平瓦研究の最近の動向」『百済研究』34、2001年。
- (5) 盧重国『百済政治史研究』一潮閣、1988年。
- (6) 金誠龜「雁鴨池出土古式瓦当の形式的考察」『美術資料』29、1981年。
- (7) 金誠龜「新羅瓦当の変遷とその特性」『古代東アジア三国の対外交渉』国立慶州博物館、2000年。
- (8) 金誠龜「雁鴨池出土古式瓦当の考察」『美術資料』第29号、国立慶州博物館、1981年。朴洪国「月城郡内南面望星里瓦窯跡と出土瓦に対する考察」『嶺南考古学』5、1988年。
- (9) 谷豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」『東洋文化研究所紀要』108、1989年。
- (10) 申昌秀「皇龍寺跡の廃瓦積み出土新羅瓦当」『文化財』18、文化財管理局、1985年。
- (11) 平松良雄「烏倉寺Ⅰ期軒丸瓦製作技法の検討」第59回百済研究公開講座、2009年。ここでは、Ⅰ期軒丸瓦についての文様表出、製作技法、接合技法などの精密な分析があった。
- (12) 筆者は、蓮弁が三角状、スペード、あるいは間弁が三角状に製作された軒丸瓦を、高句麗系の新羅瓦としたい。
- (13) 『慶州蓀谷洞・勿川里遺蹟 報告書』国立慶州文化財研究所、2004年。
- (14) 金誠龜『古瓦』デフオンサ、1992年。
- (15) 金誠龜『百済の瓦埴芸術』周留城、2004年。
- (16) 韓国と日本の一本作りについてはまだ問題が残っており、次の論考が参考になる。田福 涼「造瓦組織復元のための一試論」『文化史學』20、2003年。
- (17) 谷 豊信「西晉以前の中國の造瓦技法について」『考古学雑誌』69-3、1984年。
- (18) 權五榮「百済前期の新智見」『百済研究』33、2001年。梁淙鉉「百済漢城時代の軒丸瓦」『人文科学研究科紀要』10、帝塚山大学大学院、2008年。
- (19) 崔孟植『百済平瓦研究』1999年。
- (20) 亀田修一「百済漢城時代の瓦に関する覚書」『尹武炳博士回甲紀念論叢』1984年。
- (21) 上原 和「高句麗絵画が日本に伝えた影響」『高句麗美術の対外交渉』第4回韓国美術史学会、1996年。
- (22) 金正基「高句麗建築の對日交渉」『高句麗美術の対外交渉』1996年。金東賢「高句麗 建築の對中交渉」『高句麗美術の対外交渉』1996年。
- (23) 『固原北魏墓漆棺畫』人民出版社、1988年。
- (24) 白種伍『高句麗瓦の研究』檀国大学校大学院博士学位論文、2005年。
- (25) 申昌秀「皇龍寺跡廃瓦積み出土新羅瓦当」『文化財』18、文化財管理局、1985年。
- (26) 講堂東北側の廃瓦積みからの1点の瓦は皇龍寺と関係があるが、6世紀半ば以前の可能性もある。
- (27) シムカンジュ・ジョンナイリ・イヒョンホ『漣川瓠蘆古壘 III』韓国土地博物館、2007年。
- (28) 清水昭博「瓦の伝来—百済と日本の初期瓦生産体制の比較」『百済研究』41、2005年。

5~6 世紀 新羅와 周邊諸國의 기와

金有植

(國立扶餘博物館)

1. 머리말

古代國家의 文化交流는 自意, 他意的 關係에서 이루어져 왔다. 기와는 匠人 혹은 當時 先進知識階層에 의해 다른 地域에 傳播되고 受容되었다. 發表者는 기와의 受容에서 受容國의 文化意志와 嗜好가 重要한 作用을 하였다고 생각한다. 특히 瓦當은 國家, 時代에 따라 多樣하게 變化, 發展, 衰退함으로써 文樣의 흐름을 把握할 수 있고, 樣式的 特徵은 國家의 交流關係를 理解하는 資料가 된다. 우리는 瓦當의 片鱗을 통해 建築, 工藝 등 當時 社會相을 穿鑿하여 文化史를 復元하는데 寄與해야 할 것이다.

6 세기 新羅는 지증왕·法興王대의 體制整備를 實施하고 內在的 發展으로 成長하였다. 이 期間은 삼국이 政治, 社會적으로 飛躍적인 發展을 하였고, 서로 適切한 牽制와 均衡을 이루었던 시기이기도 하다.¹⁾ 이 시기 신라는 백제와 고구려 그리고 中國을 通하여 先進文物을 受容하였고, 또한 하나의 정치시스템으로서 佛敎라는 宗敎를 통해 國論統一과 理想社會를 實現하고자 하는 性向을 보인다.

당시 佛敎는 宗敎的 目的 외에 先進文物을 輸入하는 窓口役割을 하였다. 佛敎公認은 寺刹의 建立을 隨伴함으로써 佛像, 塔, 建築, 工藝 등의 分野에서 飛躍的인 發展을 招來하였다.²⁾ 신라가 堅固한 土着社會의 壁을 허물고 巨大한 寺院을 建立하였던 6 世紀는 新文物의 導入期이다. 特히 기와는 建築物 建立에서 核心 物品이다. 따라서 佛敎의 公認은 기와의 刮目한 發展을 招來하는 繼起를 마련하였을 뿐만 아니라, 匠人들의 職制를 포함한 生活與件을 向上시켰을 것이다.

동아시아의 對外交渉을 理解하는 作業은 매우 어렵고 慎重을 요한다. 特히 交涉은 國家, 民族, 地域間에 이루어지는 對等한 位置에서의 交流를 意味하므로 肯定的 혹은 否定的 役割을 糾明해야 한다.³⁾ 이러한 立場에서 5~6 세기 동아시아 諸國의 기와는 蓮花文 中心이므로 文樣의 微細한 形式變化를 통하여 상호 간의 흐름을 把握하고 共通分母와 차이점을 導出해야 한다.

이 발표는 精練한 사항들을 念頭에 두고, 삼국 기와의 研究 성과를 ⁴⁾ 정리하여 6 세기 신라 수막새의 제작연대를 검토하고, 연꽃잎의 淵源을 규명해 보고자 한다. 또한 6 세기 신라 연화문수막새가 차지하는 重要性에 着眼하여 본 논고를 작성하였다. 그러나 이 글은 資料의 限界와 筆者의 初步的 기와 理解수준으로 인하여 많은 誤謬들이 생겨날 가능성도

있다. 하지만 신라 막새의 수용과정을 이해하는데 조금이나마 보탬이 되었으면 하는 작은 바람에서 작성하였기 때문에 잘못된 부분은 선학들에게 容恕를 구한다.

2. 5~6 세기 신라 주변제국의 와당

5~6 세기는 고구려, 백제, 신라가 서로 물고 물리는 긴박한 상황이 이어지는 긴장의 연속이었다. 백제의 近肖古王은 고구려의 故國原王을 전사시켜 기선을 제압하고, 뒤이어 백제의 개로왕은 長壽王에게 전사를 당하는 긴박한 시기였다. 또한 신라는 관산성에서 성왕을 전사시켜 삼국의 관계가 긴장의 연속이었다. 이러한 상황에서 삼국은 외교적 관계를 포함한 문물교류가 적절하게 이루어졌을 보인다.⁵⁾

아이러니하게도 이 시기 신라의 연화문수막새에는 고구려와 백제 기와에 보이는 요소들이 크게 나타나 삼국의 교류를 이해하는 단서가 ⁶⁾ 되기도 한다. 특히 6 세기 신라 연화문수막새는 제작기법 뿐만 아니라 문양의 형식까지도 고구려, 백제와 매우 親緣性이 강하여 전술한 긴장의 관계 속에서 일정한 기간 동안은 밀접한 교류를 하였던 사실을 증명해 준다. 즉 삼국의 냉엄한 국가관계는 문화단절을 초래하지만, 때로는 일시적 화해분위기 속에서 적절한 문화의 교류가 있었다는 假定을 해볼 수 있다. 6 세기 신라의 연화문수막새는 고구려, 백제의 요소들이 보이기 때문에 신라는 양국의 선진문물을 수용하여 건축물을 제작하였다고 생각한다. 6 세기 신라 기와가 중요하게 부각되는 이유는 고구려와 백제의 문화를 수용, 발전시켜 통일신라 기와로 계승시켰다는 점이다.

1) 고구려, 백제계 연화문수막새 수용

6 세기는 신라에서 막새기와의 처음으로 만들어지는 시기이고, 연화문수막새의 연꽃 형태에 따라 백제계, 고구려계, 신라계로 구분 ⁷⁾한다. 이러한 신라 수막새의 3 형식 분류는 모든 연구자들이 대체로 동의하지만, 다만 수막새의 발생시기, 연꽃의 기원을 포함한 고구려, 백제계 속성분류를 명확하게 하지 못하고 있다. 또한 전술한 고구려계, 백제계 와당이 신라 기와 발전에 작용하였는지에 대한 구체적 연구도 미개척분야이다. 전술한 사항에 대한 접근은 결국 신라 기와의 기능적인 측면뿐만이 아니라 당시 계획된 장엄성을 이해하는 해답이 될 것이다.

다음으로 고구려계 기와가 신라지역에 파급되어 발전의 모티브를 제공하였던 점은 일찍부터 선학들에 의해 지적 ⁸⁾되었다. 하지만 신라지역에 전파되었던 고구려계 기와에 대해서는 길림 혹은 평양지역 출토품을 구체적으로 제시하지 못한 채, 문양에서 느껴지는 외형적인 모티브만을 근거로 구분하는 경향이 있다. 또한 신라 연화문수막새의 연꽃잎 가운데 능선이 나타나는 형식을 고구려의 잔영으로 보기도 하는데, 이러한 견해는 일본에서도 통용되어 고구려계 기와를 분류하는 기준으로 작용한다. 연구자들은 신라

기와에 대한 명확한 개념이 정리되지 않아 착오가 있었음을 인정해야 하고, 시급히 수정이 필요함을 암시해 주는 메시지라고 생각한다.

정리하여 본다면, 신라 기와에 보이는 고구려계 기와의 요소는 형태와 특징을 정의하기 어렵다. 그리고 백제계 신라 기와는 웅진시기 기와들과 형태상의 유사성을 근거로 막연하게 6 세기 전반에 수용하였다는 견해가 지배적이다. 이러한 상황은 신라 와당의 제작시기와 대외교섭에 관한 연구를 가로막는 장애물일 뿐만 아니라 신라 기와의 정확한 편년을 설정하는데 악영향으로 작용한다.

2) 고구려계 연화문수막새

고구려 기와는 길림지역과 평양지역 기와로 크게 구분⁹⁾된다. 한정된 지면으로 인해 자세한 설명은 생략하지만 길림지역 와당은 회갈색과 연화문, 평양지역 와당은 적색과 연화문 이외에도 다양한 문양으로 발전했다는 것으로 요약할 수 있다. 그리고 양 지역 기와는 태도와 문양, 그리고 표면의 색조, 제작기법 등 세부적 구분이 가능하다. 그럼에도 불구하고 신라의 고구려계 수막새가 어느 지역, 어떠한 형식과 직접적인 영향관계를 맺고 있는가에 대한 질문에는 누구도 명확한 답변을 제시하지 못한다.

현재까지 경주 인근에서 출토된 고구려계 연화문수막새는 경주 월성(圖 1-①,②)과 황룡사지(圖 2, 3) 등에서 출토된 유물이 있다. 전자는 월성해자의 5~6 세기 유물들과 공반 출토되었고, 후자는 황룡사지에서 출토한 스페이드 연꽃형을 지닌 일련의 연화문수막새 등 이다. 이 밖에 재매정지(圖 4) 등에서 출토된 고구려계로 보이는 다수의 와당이 있지만 구체적 증거가 없으므로 본 발표 대상에서 제외하기로 한다.

먼저 월성해자 출토 고구려계 와당은 다음과 같은 특징을 보인다. 우선 연꽃잎은 8 엽이며 양감이 매우 강조되고 있다. 또한 연꽃은 끝단과 능선을 삼각형으로 강인하게 처리하였다. 더욱이 이 와당은 표면의 경도로 볼 때 매우 높은 온도에서 소성되었을 뿐만 아니라 두께가 얇다는 특징이 있다. 연구자들은 기와의 두께가 건축구조물의 하중과 밀접한 관련이 있었을 것으로 생각하고, 특히 두께를 얇게 만드는 고난도의 작업은 장인들의 많은 노고를 수반하였을 것이다. 이 와당은(圖 1-②) 표면 공간의 부족으로 인해 1 개의 잎을 역으로 표현하고 있을 뿐만 아니라 간잎도 다른 잎과 비교하면 확연히 다르다. 그리고 문양의 외곽 홈을 미숙하게 처리하였고, 외측의 테두리를 절반으로 나누어 단을 마련한 것처럼 보인다. 결국 이 와당은 어딘가 모르게 미숙한 정황이 보이는데, 그 원인은 기술적 수준이 일정한 단계에 도달하지 못한 장인이 제작하였거나 혹은 불량품으로 추정할 수밖에 없다. 당시 월성은 최고 권력의 심장부였고, 따라서 최고급 물품만 사용하였다는 추론이 합리적이다. 불량품 혹은 영성하게 제작된 이 와당이 월성에 사용하였다는 사실을 어떻게 해석해야 할지에 대한 고민이 따른다.

또 다른 형식은 황룡사에서 출토한 일군의 고구려계 연화문수막새가 있다.¹⁰⁾ 이 와당은 연꽃잎의 끝단 폭이 급격히 축소하는 所謂 스페이드 형식(圖 2, 3, 20)이므로 어떠한 계보로도 백제계 문양 범주에 포함할 수 없다. 이 와당은 양감이 가장 강조되는 자방부와 중앙부에 별도의 소지를 밀어 넣고 와범으로 찍었던 것이다. 그래서 제작공정이 매우 복잡하므로 대량공급을 할 수 없었던 것으로 판단된다. 또한 와당을 제작하는데 복잡한 제작공정¹¹⁾은 장인의 불필요한 공력이 수반될 뿐만 아니라 제작시간이 소요되므로 경제적 낭비를 초래하여 제반여건에 악영향을 초래할 것이다. 즉 이러한 형식은 제품의 소량 생산에 적합하고, 황룡사와 같은 대규모 사찰 건립용으로 공급하기에는 다소 불합리한 제품으로 보인다. 그럼에도 불구하고 이러한 제품이 거대한 황룡사 건립에 관련되었다는 사실은 당시사회에서 황룡사가 차지하는 寺格의 중요성을 이해할 수 있다. 결국 이러한 新形式 연화문수막새의 출현은 사용처의 중요성과 관련이 있었던 것으로 이해할 수 있다. 이 연화문수막새는 태토가 지극히 안정되고, 고온에서 소성하여 전형적인 삼국시대 신라 기와의 특징을 보인다. 또한 이 와당은 정교한 연꽃잎들이 안정감을 보이므로 신라 연화문수막새를 대표할 만하다. 특히 이 수막새는 간잎과 꽃잎에 삼각상의 요소¹²⁾가 보이므로 전술한 월성해자 출토 연화문수막새와의 유사점을 찾을 수 있다.

3) 백제계 연화문수막새

백제계 연화문수막새는 월성해자를 비롯하여 勿川里¹³⁾, 安康 六通里 窯址¹⁴⁾ 그리고 경주 인근의 乾川, 그리고 최근 內南面 望星里 窯址에서 출토되었다. 전술한 백제계 수막새는 회백색과 회갈색 계통이고, 문양형식은 웅진계 백제 와당과 동일하다. 이 문양과 동일한 웅진시기 기와는 공산성을 비롯한 大通寺址, 艇止山 유적, 西穴寺址(圖 5, 6, 7) 등에서 출토된 것들과 비교¹⁵⁾할 수 있다.

그러나 양자를 면밀하게 분석해 본다면 세부형식에서 차이를 발견할 수 있다. 즉 웅진시기 연화문수막새는 신라지역에서 출토되는 수막새보다 꽃잎끝단에 배치하는 주문이 약화되는 현상이 관찰된다. 필자는 신라지역에서 보이는 백제계 연화문수막새가 웅진시기 연화문수막새와 비교대상이 아니라 오히려 웅진기의 선행양식으로 보는 것이 합리적인 해석이라고 판단된다. 따라서 이러한 형식은 웅진기 전기 단계 건축물과 한성시기 말기 건축물의 기와들과 관련되었을 가능성을 새롭게 제시하고자 한다. 왜냐하면 웅진시기 수막새는 연꽃잎이 신라의 것보다 퇴화하고 간략화 되는 단계로 이해되어 백제계 신라 수막새기와보다 오히려 제작시기가 늦어질 가능성도 엿보이기 때문이다. 향후 한성기의 백제기와 혹은 웅진시기의 선행형식 기와가 출토될 가능성의 여지를 남겨두어야 할 것이다.

그렇다면 웅진시기에 유행하였던 백제계 연화문수막새가 신라 수막새 발전에 어떠한 영향을 미쳤는지 주목해 볼 필요가 있다. 실제 경주지역에서 웅진계 영향이 看取되는 연화문수막새는 여러 유적에서 출토되어 백제 기와가 신라기와의 발전에 결정적 영향을 끼쳤다는 사실에는 동감한다. 이와 관련하여 최근 경주 내남면 망성리 가마터에서 동일한 형식의 연화문수막새(圖 8)가 출토되어 월성에 공급하였던 것으로 밝혀졌고, 또한 동반유물들이 5세기 후반까지 상회할 가능성도 있다는 견해가 제기되고 있다.

따라서 백제계 기와는 신라지역에 보급되어 6세기경부터 신라 연화문기와의 형성에 결정적 역할을 하였을 뿐만 아니라 점차 발전하는 토대를 마련하였다고 생각된다. 삼국시대 신라 기와의 전개는 백제로부터 연화문을 수용하고 이를 점차 발전시켜 신라화하는 단계로 변화되었다고 추정된다. 이러한 논지는 신라기와에 채용된 백제계 기와의 둥근 연꽃잎 끝단처리와 Y자형의 간잎의 유행을 통해서도 증명될 수 있다. 향후 이 부분에 대한 심도 있는 검토가 요구된다.

3. 5~6세기 신라 주변제국 와당의 제작기법

6세기 신라의 연화문수막새는 제작기법 면에서 크게 2형식으로 분류된다. 한 형식은 원통형 수키와를 접합하고 수키와의 절반을 자르는 방법과 수키와를 절반으로 자르고 막새 뒷면에 부착하는 형식이 있다. 이 가운데 전자는 소위 一本造¹⁶⁾라 불리는 것으로 월성해자(圖 9-①,②)를 비롯한 물천리 경마장부지(圖 10-①,②,③) 출토, 내남면 망성리 요지(圖 8) 출토품이 대표된다. 출토품 가운데 건천, 안강 육통리 요지 출토 연화문수막새 등은 꽃잎의 형식은 백제계이지만, 제작기법은 후자에 속한다. 특히 월성해자 출토 백제계 연화문수막새는 웅진기 형식을 보여주므로 신라의 수막새 제작 開始를 6세기 전반으로 끌어올리는 자료가 되었다. 또한 물천리를 비롯한 내남면 망성리 가마터에서도 동일한 형식이 출토되어 궁궐지에 공급하였던 제작소의 위치를 확인시켜 주었다.

6세기 전반 백제계 연화문수막새가 一本造라는 특수한 제작기법을 보이는데 이것은 중국의 서진 이전에 보이는 제작기법과 유사하다.¹⁷⁾ 이 방법은 수막새의 뒷면을 약 0.5cm 도출되게 남겨두고 자르는 수법으로서 고대 한반도의 낙랑, 한성시기의 수막새에 보이는 제작기법이다.¹⁸⁾ 그래서 낙랑지역에서 출토되는 궐수문수막새(圖 11)가 一本造 수법의 선행기법이고 뒤이어 한성시기에도 보이는 기법이다. 그러나 궐수문 낙랑기와가 고대 한반도 기와 발전에 영향을 주었는지 여전히 의문이며, 낙랑 출토 기와의 문양과 태토 그리고 제작기법 또한 평양의 고구려 기와들과 직접적 관련 요소를 구하기 어렵다는 난제가 있다.

최근 백제 전기의 기와에 대한 연구가 의욕적으로 진행¹⁹⁾되어 점토띠를 이용한 성형, 두께의 불균형, 미세한 포목흔, 泥造盤築技法의 특징을 보인다는 견해들이 제기되었다.

이러한 특징들은 낙랑 瓦와 관련이 있고, 한성시기의 기와는 樂浪瓦와 연결될 가능성을 열어 둔 견해들이 주목된다.²⁰⁾ 앞으로 새로운 자료가 보충됨으로써 낙랑, 고구려 그리고 백제 기와의 상호 관련성이 규명될 것으로 기대된다.

한성시기 백제 수막새는 풍납토성, 몽촌토성, 석촌동, 삼성동에서 출토된 수막새가 대표된다. 이 시기의 수막새 문양은 점문을 비롯하여 기하문, 초화문, 연화문, 전문이 있고, 신라 수막새와 제작기법에서 유사한 형식으로는 풍납토성, 몽촌토성, 석촌동 출토 기와들이 있다. 이 가운데 특히 풍납토성 출토품(圖 12)은 제작기법에서 백제계 신라 수막새와 동일하지만, 문양은 판이하게 다르다는 특징이 있다. 그리고 몽촌토성 출토 연화문수막새(圖 13-①,②)는 연화문이 능형과 단엽의 두 가지 형식이지만, 능형의 연화문(圖 13-①)은 막새뒷면이 문양면을 향하여 휘어져 있고, 단엽의 연화문(圖 13-②)은 제작수법이 신라의 백제계와 유사하다. 아울러 석촌동에서 출토된 錢文수막새(圖 14)도 신라 수막새와 제작기법이 동일함을 엿볼 수 있다.

6 세기 전반의 백제계 신라 기와는 점토띠를 이용한 성형과 두께의 불균형 등 초기 瓦陶兼業段階의 특징을 여실히 보여주어 한성기 백제기와의 특징이 보이지만, 문양면에서는 웅진기와 친연성이 강하다. 결국 막새의 접합기법으로 본다면 신라기와는 낙랑, 한성시기와 동일한 범주에 포함해야 할 것이다. 이 시기는 점토띠를 이용한 성형기법이 강하게 나타남으로서 초기 와당 제작에서 토기 장인의 참여가 있었는지 주목해야 할 것이다.

4. 6 세기 신라 수막새의 연원과 편년

1) 수막새의 연원

기와 연구자들은 6 세기 신라 연화문수막새를 백제계, 고구려계로 분류하고 전자는 중국의 남조로부터 영향을 받은 사실을 중요시 한다. 발표자는 백제연화문의 남조 관련성에 동의하지만, 이에 앞서 한성기에서부터 연화문이 유행하였다는 사실을 강조하고 싶다.

신라의 고구려계 연화문수막새는 그 연원을 어디에 두어야 하는지 정확히 알지 못한다. 그저 길림 혹은 평양지역 고구려 연화문수막새들과 형태가 유사하므로 고구려와 관련을 시킨다. 그러나 上原和²¹⁾는 고구려 벽화에 보이는 연화문을 구조적으로 분석하여 벽화의 연화문과 길림지역에서 출토되는 초기 고구려연화문 수막새를 관련시켰다. 즉 고구려 安岳 3 호분 西側室被葬者 主人圖(圖 15), 舞踊塚 壁畫(圖 16), 長川 1 호분 前室(圖 17), 雙楹塚(圖 18) 등에 보이는 연꽃들은 길림지역 출토 연화문수막새의 연꽃문양과 동일하다는 사실을 밝혔다. 그리고 이러한 형식은 중국의 山東省 沂南 畫像石 後漢墓과 甘肅省 酒泉縣 丁家 5 호墓 등의 연꽃과 관계가 있다는 견해를 피력하였다. 아울러

천왕지신총 벽화에 보이는 인자형 대공은 북제부터 나타나 북위시기에 유행하였던 화북지방 건축양식으로 이해하는 견해²²⁾가 제기되어 고구려 건축이 북제, 북위와 밀접한 관련성이 있다는 주장도 念頭해 두어야 할 것이다.

한편 고구려 고분벽화와 신라 기와에 보이는 연봉형 연꽃은 중국 固原의 北魏墓²³⁾에서도 보인다. 이 墓에서는 鏹斗, 陶器, 銅帽 등 다량의 北魏係 유물이 함께 출토되었다. 특히 漆棺의 뚜껑에 있는 그림(圖 19)은 고구려 벽화와 신라 기와에 보이는 Y 자형연봉문과 유사하여 서로의 관련성을 유추할 있는 자료가 된다. 이 무덤의 부장품 중에는 사산조 페르시아 왕조의 貨幣(457-483 년)가 출토되었다. 이로 미루어 연봉형 연화문은 북위시대부터 고구려, 신라지역에 유행하였던 연꽃으로 가정하여도 무리한 추정은 아닐 것이다. 만약 전술한 推論이 용인된다면, 신라의 연봉형 연화문(圖 4, 20)은 고구려 나아가 北魏 문양과의 관련 가능성을 제기할 수 있다. 특히 연봉형 연화문은 고구려 길림지역의 태왕릉 출토 연화문수막새(圖 21)와 전술한 고구려 고분벽화 및 固原의 北魏墓에서 상호 친연성을 보이고 있어서 주목된다.

회화와 달리 기와는 전래과정에서 장인집단이 직접 往來하여 기술을 전수하는 경향이 있다. 하지만 새로운 문화의 전파경로를 파악하는데 재질이 다른 요소라 할지라도 형식적인 특징을 통해 서로간의 상관성을 이해하는데 활용될 수 있다. 특히 연꽃은 국가나 시대별로 다양하고 특색 있게 변화하고 지속적으로 발전하므로 대외교섭의 실상을 이해하는데 매우 중요한 자료이다. 더욱이 한 국가의 문화발전은 주변 문화권과의 교류에 의한 문화수용뿐만 아니라, 이를 독자적인 문화로 발전, 繼承하였는지의 文化變容이 더욱 중요하다고 생각한다.

2) 연화문 수막새의 편년

신라 기와 연구자들은 신라의 막새 발생을 대체로 6 세기전반 경에 두는 것에 同意하며, 三國史記 新羅本紀 祗摩王 11年(122年)에 기와가 바람에 날린 기록을 그대로 믿는 사람은 그리 많지 않다. 하지만 이미 고대 한반도는 고구려가 4 세기 이전에 막새기와를 제작²⁴⁾하여 사용하였고, 백제도 한성기부터 본격적으로 기와를 사용했다는 사실, 5 세기에 이르러 토기가 비약적으로 발전하는 단계임을 잊어서는 안 될 것이다. 이러한 사실을 동의한다면 신라 기와의 발생시기는 당연히 올려보는 것이 합리적이라고 생각한다.

기존에 신라 기와의 발생시기를 늦게 보는 원인은 日本書紀에 보이는 불교의 전래와 기와기술이 함께 전해졌다는 기록을 중요시하였기 때문이라고 생각한다. 그렇지만 고구려, 백제가 4~5 세기경 건축물에 막새기와를 사용하였다는 연구결과를 정설로 받아들이는 현시점에서, 신라만 6 세기에 이르러 막새가 발생하였다고 보는 것은 불합리하다고 생각된다. 신라 기와 연구자들이 기와 혹은 막새 발생을 6 세기로 보는 견해는 막새기와의 출현을 불교사찰의 창건과 궤를 같이한다는 고정관념에 시각을 두었기 때문이다. 불교의

공인과정에서 유별히 사회적 마찰을 빚었던 신라는 불교건축물보다 궁궐과 관아 건물에 기와 혹은 막새를 먼저 사용하였다는 필자의 가설에는 변함이 없다. 기와의 사용이 불교건축물보다 궁궐건축물에 선행되었다는 견해를 수긍하기는 어렵지 않다. 기와 연구에서 객관적이고 합리적인 접근이 방향이 있음에도 불구하고 선입견을 가지고 몰입하는 자세는 止揚해야 할 것이다.

신라의 고구려계 기와는 월성해자와 황룡사지 출토품이 대표된다. 그 가운데 월성해자 출토 연화문수막새는 그 연원이 어디인지 명확히 말할 수 없지만, 꽃잎의 형태와 제작기법, 그리고 표면경도 등을 근거로 연구자들은 고구려계로 단정한다. 이러한 막새는 황룡사지 폐와무지에서도 출토되지 않았고, 현재까지 오직 월성해자에서만 출토되는 형식이다. 이러한 사실을 감안한다면 이 막새의 제작연대는 황룡사지 창건연대인 6세기 중엽 이전이 하한일 것이고, 상한연대는 6세기 전반에 두어도 무리는 없을 듯 하다. 필자는 이러한 형식을 월성해자에서 출토하는 연화문수막새 가운데 가장 초보적 단계의 수막새 범주에 두고 싶다. 왜냐하면 주변부의 미숙한 처리 수법, 고식의 연꽃잎, 그리고 다른 유적지에서 출토되고 있지 않은 점과, 양감 있게 처리한 꽃잎과 삼각형의 간잎 등이 일반 고식 기와들과 다르기 때문이다. 아울러 이러한 형식의 연화문수막새는 5세기 후반대의 토기들과 공반되고 있다는 사실도 시사하는 바가 크다.

한편 고구려계 막새는 황룡사 창건을 기점으로 크게 변화하는데, 꽃잎 형식이 기존의 삼각형 구도에서 꽃잎의 끝단이 급격히 축소하는 소위 스페이드 형태로 변화한다. 이 형식들은 廢瓦무지에서 출토되었으므로 황룡사 창건 혹은 그 이전 시기에 제작되었을 가능성²⁵⁾도 배제할 수 없다. 특히 Y자형 능선이 새겨진 막새편(圖 20)은 1점에 불과²⁶⁾하여 제작연대 설정에 신중을 기해야 한다. 이 편은 길림지역에서 유행한 Y자형 능선을 가진 연꽃잎 형태와 고구려 고분벽화의 연꽃 그리고 중국 고원의 북위묘 칠관에 보이는 형태와의 친연성이 주목된다.

전술한 고구려계 신라수막새는 瓠蘆古壘산성(圖 22)의 출토²⁷⁾에서 보이는 것처럼 연꽃과 간잎의 형태가 삼각형을 이루어 강인함을 드러내는 요소를 보인다. 하지만 이 형식의 기와들을 생산한 窯址가 드러나지 않아 연구에 어려움을 준다. 기와제작소는 당시 장인들이 사용하였던 토기를 비롯한 생활용기들과 가마생산물들은 대외교류의 확실한 물적 증거자료이기도 하다.

백제계 수막새의 제작기법은 두 가지 형식을 보이는데, 一本造와 끼워넣기식의 수법이 동시에 보인다. 전자는 제작기법에서 한성기와 관련되지만, 문양은 웅진기 연꽃과 관련이 있다. 앞서 지적하였다시피 웅진시기인 공산성, 정지산 유적, 서혈사지, 대통사지 등에서 출토되는 수막새²⁸⁾는 연꽃잎의 끝단이 신라의 백제계 수막새와 비교하여, 꽃잎 끝단의 주문이 약화되는 현상을 보임으로써 신라 수막새는 웅진기보다 선행단계일 가능성도 있어

보인다.(圖 23) 이와 함께 신라 기와 제작기법은 한성기의 막새와 관련성이 보이기 때문에 제작시기를 웅진기 중엽에 두는 견해는 수정되어야 할 것이다. 앞으로 웅진기의 전기 유적지 혹은 한성기의 말기 단계 유적지에서 막새들이 출토된다면 신라지역 수막새의 발생연대와 관련된 베일을 걷어낼 수 있을 것으로 기대된다.

비록 추론이기는 하지만 신라 막새의 출현 시기는 5 세기 후반에서 6 세기 초로 편년을 설정해 두어도 무리는 없다고 생각된다. 그리고 이러한 설정은 신라의 막새기와가 웅진기 유적지에서 출토되는 막새들보다 선행형식을 수용하여 제작되었을 가능성이 높다는 사실에 바탕을 둔다. 아울러 웅진기 기와는 문양이 안정되고 구상권이 정제되었을 뿐만 아니라 제작기법으로 보더라도 본격적인 발전단계에 접어들었던 점을 강조하고 싶다.

5. 마무리

필자는 신라와 주변제국의 기와를 검토하였다. 기술한 내용에는 정확한 증거를 제시하지 못한 부분도 있었음을 是認한다. 하지만 신라의 궁궐지에서 출토되는 막새는 웅진기의 기존 출토 막새보다 선행단계이므로 기존의 편년 안은 재고를 요한다. 더구나 최근에는 경주 인근 유적지가 발굴됨으로 백제의 선행와당이 출토되고 있어 신라 와당의 출현은 기존의 편년인 6 세기 전기보다 상회할 가능성에 무게를 더한다. 발표자는 구체적 물증보다 형식적 변천을 중시하여 신라의 백제계수막새는 웅진시기보다 이른 단계일 가능성을 제기하였다. 이 점은 향후 여러 비판이 제기될 가능성도 있지만 앞으로 백제의 고토인 서울과 공주지역의 유적발굴을 통해 보다 확실한 증거들이 보장되기를 기대한다.

지금까지 신라와 주변제국의 기와에 대해 검토한 내용을 간추려 요약하여 보자면 다음과 같이 정리된다.

1. 월성해자에서 출토된 고구려계, 백제계 막새의 출현은 6 세기 1/4 분기 혹은 5 세기 후반 경까지 상회할 가능성도 엿보인다.
2. 기록을 믿지 않는다 할지라도 연구자는 신라에서 일반기와의 사용이 6 세기 전반으로 보는 견해는 수정을 요한다. 또한 앞으로 평기와 발생은 특정 시기에 한정을 두지 말고 고고학적 발굴 성과에 기인하여 연대설정을 해야 할 것이다.
3. 기와의 제작과정에서 얻어진 一本造는 중국, 낙랑, 한국, 일본의 연구자들이 시급히 검토해야 할 것이며, 이러한 기법은 고대 한반도에서 낙랑, 한성기 백제, 신라 초기 기와에 함께 보인다는 점을 염두에 두어야 할 것이다.
4. 신라는 6 세기 초엽 이전에 고구려계, 백제계 기와기술을 수용하여 변화 발전을 도모하였고, 6 세기 중엽에는 고구려계의 신형식이 출현하였음을 알게 되었다. 또한 신라에서 유행하였던 고구려계 연화문은 북위까지도 유행하였던 모티브일 가능성도 제기하였다. 많은 叱正을 바란다.

註

- 1) 朱甫墩, 2002, 『金石文과 新羅史』, 知識産業社
- 2) 大橋一章, 2008, 「일본 고대 문화상의 관점에서 본 백제 금속공예」, 『고대 동아시아사의 금속공예』, 국립부여박물관 국제학술대회
- 3) 安輝濬, 1996, 「美術交渉史研究의 諸問題」, 『高句麗 美術의 對外交渉』, P.11
- 4) 崔孟植, 2001, 「평기와 研究의 最近動向」, 『百濟研究』 34
- 5) 盧重國, 1988, 『百濟 政治史 研究』, 一潮閣
- 6) 金誠龜, 1981, 「雁鴨池 出土 古式瓦當의 形式的 考察」, 『美術資料』 29
- 7) 金誠龜, 2000, 「新羅瓦當의 變遷과 그 特性」, 『古代 동아시아 三國의 對外交渉』 國立慶州博物館
- 8) ① 金誠龜, 1981, 「雁鴨池 出土 古式瓦當의 考察」, 『美術資料』 第 29 號, 國立中央博物館
② 朴洪國, 1988, 「月城郡 內南面 望星里 瓦窯址와 出土瓦窯에 대한 考察」, 『영남고고학』 5
- 9) 谷豊信, 1989, 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」, 『東洋文化研究所紀要』 108
- 10) 申昌秀, 1985, 「皇龍寺址 廢瓦무지 出土 新羅瓦當」, 『文化財』 18, 文化財管理局,
- 11) 平松良雄, 2009, 2 「烏舎寺 I 期 수막새 제작기법의 검토」, 제 59 회 백제연구 공개강좌에서는 I 期수막새의 와당문양 표출, 제작기법, 접합방법 등 세밀한 분석을 실시하였다.
- 12) 필자는 연꽃잎이 삼각형이거나 스페이드형태 혹은 간잎의 형태가 삼각형으로 처리된 수막새를 고구려계 신라기와의 범주에 포함하고자 한다.
- 13) 『慶州蓀谷洞勿川里遺蹟 報告書』, 2004, 國立慶州文化財研究所
- 14) 金誠龜, 1992, 『옛기와』, 대원사
- 15) 金誠龜, 2004, 『백제의 와전예술』, 주류성
- 16) 한국과 일본의 一本造에 關한 사항은 여전히 問題로서 다음의 論考가 참고 된다.
田福凉, 2003, 「造瓦組織 復元을 위한 一試論」, 『文化史學』 20
- 17) 谷豊信, 1984, 「西晉以前の中國の造瓦技法について」, 『考古學雜誌』 69-3
- 18) ① 權五榮, 2001, 「百濟前期의 新智見」, 『百濟研究』 33
② 梁淙鉉, 2008, 「百濟漢城時代의 軒丸瓦」, 人文科學紀要 10, 帝塚山大學
- 19) 崔孟植, 1999, 『百濟 평기와 研究』
- 20) 龜田修一, 1984, 「百濟漢城時代의 瓦에 關する 覺書」 『尹武炳博士回甲紀念論叢』
- 21) 上原和, 1996, 「高句麗繪畫가 日本에 끼친 影響」, 『高句麗 美術의 對外交渉』, 4 회 韓國美術史學會
- 22) ① 金正基, 1996, 「高句麗 建築의 對日交渉」, 『高句麗 美術의 對外交渉』
② 金東賢, 1996, 「高句麗 建築의 對中交渉」, 『高句麗 美術의 對外交渉』
- 23) 『固原 北魏墓 漆棺畫』, 1988, 人民出版社
- 24) 白種伍, 2005, 『高句麗 기와 研究』, 檀國大學校 大學院 博士學位
- 25) 申昌秀, 1985, 「皇龍寺址 廢瓦무지 出土 新羅瓦當」, 『文化財』 18, 文化財管理局,
- 26) 강당 동북편 폐와무지에서 1 점은 황룡사 창건과 관련도 있겠지만, 6 세기 중엽 이전까지 가능성을 열어 두어야 한다.
- 27) 심광주, 정나리, 이형호, 2007, 『漣川瓠蘆古壘Ⅲ』, 한국토지박물관
- 28) 清水昭博, 2005, 「瓦의 傳來—백제와 일본의 초기 瓦 생산체제의 비교」, 『백제연구』 41